
ラブカクテルス その5 4

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その54

【Nコード】

N8040D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は何処に行こうか、迷っている方におすすめできるカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前はワクワクレストランでございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺は窓の外を見る。

雨だ。

このところ随分と長い間、休みの日に限って雨ばかり。

子供達はそろそろ、そんな退屈さに飽きてきている。

生き物には恵みの雨でも、育ち盛りの男の子には、ただの憂鬱な水でしかない。

来週の天気も雨らしい。

仕方ない。

いい加減、どこかに連れて行くしかなさそうだ。

かみさんも息子二人の暴れ様に、かなりのストレスを溜めているらしく、機嫌が悪い上に、何かという怒鳴りまくっている。

そんな家族の様子にこの俺までもが少しイライラを覚えて、子供達にも気付かないうちに少しキツイ態度で接しているように思えた。

さて、どこがいいだろう。

俺は会社帰りのため息が充満する電車の中で吊革につかまりながら、あちこちに張られている広告に目をやった。

温泉に海外旅行。遊園地にショッピング。

どれもかなりのお金が係る。

しかも遠い。

もっと、雨もお構いなしの身近な施設や、遊戯場所はないものか。できればそれほどお金が係らないことに超したことはないが。

そんな事をぼんやり考えている俺の目に、ある広告が気を止めた。

日曜日の朝。

予想通りの土砂降りの雨。

俺は嫌がるかみさんと子供達を無理矢理布団から引きずり出して、出掛けるからと言って支度をさせた。

一同が一斉に、雨なのにごどこへ行くつもりだと口を尖らせてなじる。しかし俺はいいからと背中を押して、半ば強引に三人を煽った。

支度が終わったのは約束の時間の五分前。

ギリギリだ。

俺がソワソワしていると玄関のチャイムが鳴る。
いよいよだ。

ワクワクレストランでございます。

俺は皆を急かしながら、今行きますと、家の中から声を上げた。

ドアを開けるとそこには、黒のタキシードを着た品のよさそうな小柄の男が、丁寧^{ていねい}に頭を下げて立っていた。

そしてその男の後ろには派手な色彩で彩られたバスが静かなエンジン音を申し訳なさそうに鳴らしながら、自分達を出迎えていた。

かみさんと子供達は、それを見て、これからどこにいくのか、何を

するのかを悟つたらしく、かなり興奮した笑顔で俺の顔を見た。得意気な笑顔をした俺は早速バスに乗り込んだ。

そして家族もそれに続いた。
雨を激しく受け、俺達を乗せたバスは間もなくして発車したのだった。

バスの中は見るからにフカフカで、形の違う色々なソファアがランダムに置かれ、俺達は子供達と一緒ににはしゃぎながらあちこちと座りまくった。

まるでそれは底がないくらいに、体が隠れてしまう程の柔らかい物や、はたまたハンモックのようにプラプラと揺れる物。座るとピカピカと光り出す物や、飛び跳ねる物まで様々なそのソファア達が、とてもバスの中とは思えないくらいの空間に置かれ、

前菜にもなりません、どうぞおくつろぎをと、先程の迎えの男は笑顔で言い、クルクル回るソファアを上下させて俺達が楽しむ顔を満足気に見ていた。

そのうちに、家族の皆がそれぞれのソファアに落ち着くと、アナウンスト共に、バスの内壁全体がスクリーンになったように映像が流れ出した。

これから向かうワクワクレストランの案内が心地よい音楽と共に紹介された。

この度は当ワクワクレストランにお越し頂きありがとうございます。ご承知の通り、当レストランはただのレストランとは違い、皆様がそれぞれの楽しみを味わう事が目的の施設でございます。どうぞ最後までお楽しみください。

なお、本日のメニューは南国ビーチパラダイスコースに、ジャングルアドベンチャーコース、スペースタウンコースとスピードトライアルコースの四種類をご用意していますので、到着した後に手続き

をする際までに、本日のメニューの中から好きなコースをお一つお選び頂くようお願い致します。

なお、お客様をお待たせさせないためにも、バスがレストランに到着するまでにはコースの選択の方をお済ませ頂くように、何卒ご協力をお願い致します。

そのアナウンスの最中には、各種のコースのイメージ映像が、凄い迫力でバスの中全体に映し出され、俺達家族の心はそれだけでもお腹がいっぱいになりそうな勢いで歓声を挙げ、とりあえずそれだけで疲れてしまったほどだった。

いよいよレストランに着いた。

やはりかなり激しい雨は止む気配を見せない。

しかし俺達家族はもうそんな事は気にも留めていなかった。

レストランの入り口でチケットを買った。

かなり安い値段だが、まあ、そんなところか。

俺達は結局、それぞれの意見が割れ、各人が別々のコースを楽しむ事となった。

それを先程の迎えの男に告げると、それならばと、カメラ付きの腕時計を四つ、俺達に手渡した。

なんでも、幾つかあるボタンを押すことによってそれぞれのその時の状況が画面に映し出され、様子を確かめることができるものだから、安心して各コースを楽しむ事ができると、丁寧な口調で教えてくれた。

俺達はその説明にまたもや歓声を大きく挙げた。

なんて便利で気の利いたサービスなんだ。

家族全員が感動に近い感覚に、ほころぶ顔を隠せずにいた。早速全員は入り口で軽く挨拶を交わして別れた。

俺は年甲斐もなく、スピードトライアルコースを選んだ。

実は、俺は若い頃からモータースポーツが大好きで、乗り始めの頃はかなりのスピード狂だった。

そしてそれは周りの仲間連中の間でも有名だったが、しかしさすがに結婚してからと言うもの、そういう訳にもいかずに、この頃は安全運転の日々が普通となっている。

しかし今日は違う。

このワクワクレストランの中で俺は久々にあの頃の自分に戻って大いに楽しむのだ。

暗く低いトンネルの様な通路を潜るようにして進んだ先には、先ず青空が眩しいサーキットコースが広がっていた。

俺は受付のバーコードを読み取る機械にチケットをかざしてゲートを開き、手摺りで仕切られている通路を早足で歩く。するとどこからともなくアナウンスが聞こえてきた。

どうやら、その先にある何種類かのレーズカーの中から好きなものを選んで乗り込み、それを自分で運転して一周回る。そしてそのあとは、コンピュータの操作でオートメーション走行をしてから次に行く。

そんな内容らしい。

俺はそんな中から一番速そうな赤と白のツートンのものに乗り込みエンジンをけた。

なるほど。いい音をしている。

オイルの焼ける匂いも格別だ。

早速俺はアクセルをいきなりめいっぱい踏み込んだ。

凄じい音が俺の隠れていた本能をいきなり呼び醒ます。

その瞬間の俺の目の色は、きっといつもの父親のものとは違う色になっていたとだろう。

レーズカーは俺に応えるように難しいコースを駆け抜ける。

最高の気分だ。

俺は久しぶりに風になった気がした。

やがて俺はコースを一周してチェッカーフラッグを受けた。

一周といってもこのコースはやたら長い距離を使って造られているらしく、それだけでも十分満足することができた。

そして次はオートメーションでの走行が始まった。

俺は試しにハンドを回してみたが、それには抵抗がもうなかった。

レースカーは完璧なコーナリングをこなしながらコースを走り抜ける。

まるでジェットコースターのサーキット版といった勢いで、その体感はずまじいものだった。

思わず歯をくいしばる程の迫力。

俺は歪む顔に笑顔を浮かべて失神しそうになった。

最っ高ーだー！

前菜は終わった。

俺はそのサーキットを後にして、カフェでコーヒーと、かなりのボリュームがあるサンドイッチを食べて、今の興奮を思い出してニヤニヤした。

コーヒーのホロ苦い香りとともに。

そして気持ちが落ち着いたところで、俺は家族の事を少し気にし始めた。

自分だけ楽しんでいたらどうしよう。

とりあえず俺は入り口で借りた腕時計式カメラ付きのトランシーバーにある幾つかのボタンを、教わったやり方で操作してみた。

そしてそこにはかみさんの姿が映し出された。

心地よい波の音がビーチには漂っていた。

椰子の木に掛かったハンモックに揺られながら、少しイカしたボーイさんにトロピカルジュースを注文して、それをストローで飲みな

がら、心を解放させる。

この時間は私のもの。

イライラさせるものもないし、洗濯も掃除も料理も子育ても、ここではしなくていいのだ。

私は体を思いつきり伸ばして、最っ高ーつと唸った。

それを見たさっきのボーイさんが私に声を掛けてきた。

お散歩などいかがですか？

ボーイは片手に上品で賢そうな犬を連れていた。
なるほど。砂浜と言えば、

履いている靴を脱いでそれを片手で持ち、犬とはしゃぎながらいい男と走る。まるで青春映画のワンシーンだ。

私はボーイに頷いて手を差し出すと、彼はその手を取り、爽やかな笑顔でエスコートしてくれ、私は満面の笑みを浮かべた。

そのうち辺りは夕陽の沈むオレンジ色に染められて、私が憧れたていたロマンチックで最高のシュツエーションを迎えた。

砂浜に腰を下ろして、片手で大人しくしている犬を撫でながら、片手で砂をすくってはサラサラと流すことを意味もなく繰り返して、そのゆっくりとした時間に酔いしれた。

そして、なぜか悲しくもないのに涙が溢れてくるのを止められずいた。

日が沈んで、ビーチにある、屋根が枯れ草で出来ていて店内の灯りはロウソクだ

けの、南国ムード満天なレストランで、エスニックな料理に舌鼓。
爽やかな風に頬を撫でられながら。

どうやらかみさんの顔を見る限りでは、満足しているようだ。

この頃見ていない昔の綺麗な彼女の顔がそこにはあった。

それでは息子達はどうかだろう。

スペースタウン。

無重力のこの町は、特別なスーツを着ないと中には入れない所だった。

一応空気もないかららしい。

僕はその動きずらいスーツの説明をアナウンスで受けて、左腕に付いている幾つかのボタンとパネルに目をやりながら、その機能に感心した。

ドアが開いて僕はそのスペースにはいる。

なんだか体が軽い。

引力も少し弱くできているみたいで、軽くステップを踏んだだけなのに、僕は大きく跳ね上がった。

わっっ！

体がクルクル回りだして、なかなかコントロールができない。

しばらくもがいて、やっとなんとかコツを掴んだ。

僕は一度着地して、それつと、高く跳ねたかと思うと、空中で三回転を決めて見せた。

僕はその無重力にハシャギ、泳いでみたり、羽ばたいてみたりと、子供じみた真似までして楽しんだ。

そしてそんな事に少し飽きてきた頃、僕はどこからともなく、地響きのような振動を感じた。

あちこち周りを見回すと、頭の上に突然光る円盤が姿を見せた。

僕は驚き、しばらくそれを見ていると、その円盤はいきなり僕に、何かレーザーのような物で攻撃を開始してきた。

僕はそれをアクション映画なみの跳躍力でピョンピョンと跳びながら避けて、これが侵略者かと、腕のパネルのボタンを押した。

すると間もなくして、僕の目の前には、人の倍くらいの大きさのパワースーツが現れ、まるで僕を包むようにして覆い被さってきた。

それには説明にあつた通り、腕には銃のような武器が握られてあり、僕はそのパワースーツを操り、侵略者の円盤に攻撃を開始した。初めに出てきた円盤は、難なく打ち落とすことができ、それは凄惨な迫力で僕の目の前に墮ちて来たが、その途端、僕の上空には無数の円盤が現れ、いよいよ本格的な戦いが幕を開けた。

次々に僕はその円盤達を、無重力をうまく利用した戦法で仕留めていった。

数は多いだけあつて、この戦いはやりがいがあり、僕は未だかつてない興奮を感じながらそれに夢中になった。

そしてそこいら中を円盤の残骸で埋め尽した頃、これまでにない轟音と、派手な光と共に、きつと円盤軍団の親玉的な巨大な円盤が、空を覆い出した。

僕は少し荒くなつた息を整えて、それに向かってジャンプした。

無数の光りの矢が、そんな僕めがけて飛んでくるのを必死でよけながら。

そして、さすがに手強い親玉円盤の中心に開いている穴に銃弾を撃ち込んだと同時に、僕にもレーザーが当たり、相撃ちになった。

パワースーツは僕からスツと消えてなくなり、僕は体を丸めて何回も回転し、着地した。

体を立ち上がらせて見つめた目の先には、赤々と燃えて墮ちていく親玉円盤が、黒い煙とともに遠くの地面に着くと、それは大爆発し、空には大きく、

ゲームオーバー。ステージ1クリア

と描かれ、僕はその勝利に思わず飛び跳ねながら喜んだ。

次のステージに行く前に、スーッとやってきた車のようなものに僕は乗り、昼食を執るために、レストランステーションに向かった。

かなり腹はペコペコで、そこで出てきた本格的な宇宙食は、想像以上においしいものだったのに驚き、僕は思わずほつぺたを落とすところだった。

どうやら長男は、普段あまり動かさない体をも満足させることできたらしい。

この頃受験前で机にかじりついてばかりだったし。

小さい頃から戦隊ものやSFは、よくテレビでみながら真似をしていたっけ。

なんだかしばらく振りに長男の子供らしいところを垣間見て、俺はホツとした気がした。

さて、次男はどうだろう。

草をかきわけて、やっと僕は辿り着いた。

目の前にはかなり古い時代の遺跡が、時間の流れに逆らっているように、その栄えた文明を抱えて佇んでいた。

大きく重そうな扉。

なんだか訳の解らない文字が幾つも書かれてある。

僕は入り口でもらった解説本を開き、一つ一つその文字の意味を探った。

なにやら呪文を唱えよと書かれてあるようだ。

僕は違うページを捲り、その呪文の独特なポーズを見ながら真似して叫んでみた。

少し間が空き、静かだったジャングルの様子は、途端に不気味な騒がしさに溢れ、鳥の鳴き声と、飛び立つ時に揺らす葉のざわつく音や、どこからともなく上の方から聞こえてくるサルのカン高い鳴き声のようなもの。それと同時に、その扉は低い地響きを引きずって開き、僕を迎え入れた。

心臓がドクドクと期待に興奮しだした合図をしてきた。

僕は今回、この神殿に眠る伝説の石、クリスタルアイを求めて探険

をする。

しかしそこに行くまでには、数々の罠を潜り抜けて無事、一番奥の間、王妃の室に行く必要があった。

僕は勇んで、その冒険への一步を力強く踏み込んだ。が、そこにあるはずの床はどうやら落とし穴になっていたらしく、僕はしょっぱなにも関わらずに、暗く深い穴へ落ちた。

僕は、そんな態勢ながらも必死に本を捲り、風の精霊を呼んだ。我を救いたまえ！

すると、その深い穴の底から、凄まじい風が僕に向かって吹き上げて来て、あつという間に元いた入り口に戻された。

危ないところだ。

僕は穴を覗き込んで、ため息を洩らした。

今度は慎重に行かなくちゃ。

あちこちにある罠、それは侵入者を寄せ付けなかったための呪われた仕掛け。

僕は油断しないようにと、今度は一步步つ確実に確かめながら進むことを肝に銘じた。

甃の長い廊下をヘルメットに付いているヘッドライトで照らしながら、僕は今まで感じたことのないくらいに緊迫した神経をピンと張り、まるで足の先に目が付いているかのような足取りで先を急ぐ。

回廊は天井までがかなりの高さがあり、その天井を支える柱は武装した巨人を型どった石像で出来ていて、それらが何体も何体も見事に並べられ、まるで今にも動き出しそうなリアルな姿は、僕の慎重な足取りをさらに緊張させるものとなった。

しかしさつきから誰かの視線を感じてならないが、これは一体なんなんだろう。

僕はキョロキョロと周りを見たが、そこには人の姿、いや気配すらしない。

しかしやっぱり誰かに見られている。

そんな事を気にしながら歩いてみると、僕は甃の出っ張りに足を引

っかけて、転んだ。

と、その瞬間、ドーンという大きな音が、さっきまで僕が立っていた辺りで土煙を伴い響いた。

それをよく見ると、どうやら石でできた大きな剣。

なんでこんなところにこんな剣が？

その先を見た僕はたまげた。

その剣の持ち主、視線を僕に注いでいた人物、いやそれは石像だったからだ。

石像はゆっくりとした動きで、また剣を振り上げて僕の方を凝視すると、唸り声と共にそれを再び振り下ろして、僕を襲ってきた。

僕は反射的にそれを転がりながら避けて、そんな中でなんとか逃げながら例の本を開いた。

そして息を切らして、僕は呪文を叫んだ。

鋼の精霊よっ！我に力を！

すると、本は光出したかと思うと、僕はいつの間にか武装した戦士となり、なんだか体に力がみなぎるのを感じた。

僕は振り下された、その石像の腕に飛び乗り、凄い勢いで肩まで駆け登り、その頭に向かって渾身の一撃を食らわした。

石像は悲痛の表情と共に、砂になって消えた。

僕は肩に入っていた力を抜き、やれやれとまた先に進んだ。

奥にある王妃の室に向けて。

しばらく歩いた先に、セーフティエリアと書かれた、レストランを見つけた。

丁度いいところに。実はお腹が空いていたところだったんだ。

僕は店の真ん中の席に就くと、ジャングルステーキを注文して、幻の泉ジュースで喉を癒した。

それは今までに飲んだ飲み物の中で、一番おいしいジュースで、まさに奇跡的な、幻なだけはあるものだった。

ステーキもこの上ない柔かさで、味も香ばしさに加えて、ソースの

濃厚さは言うことがなく、思わずしびれてしまうほどの感動を覚えた。

さあ、また食べたなら王妃の室に向けて出発だ。

その劇的なレストランの味でお腹を満腹しながら体に気を取り戻して、僕はまた奥に向かって歩き出した。

俺は皆がそれぞれ楽しんでいることに満足し、それなら俺もと、今度はダートのコースをラリーカーに乗り込んで走り始めた。

いやいやこのご家族は、実に想像力が豊かですな。

幾つもの画面がある部屋で、あのバスにいた迎えの男が各映像を見ながら呟いた。

雨の日はやはり商売繁盛。忙しい忙しい。

しかしいい商売だ。

人に夢で遊んでもらおうなんて。

大したスペースも要らないし、危険もない。

お客様の遣りたい放題。

時間になったら、夢を操れる装置をコントロールして、記憶を都合に合わせて作

ってやり、目を醒させる。

実に労力を必要としない仕事だ。

さて、次のお客様が待っているからそろそろ終わりにしないと。

男は画面から伸びた端末をカチカチと打ち込み始めた。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8040d/>

ラブカクテルス その54

2011年1月20日14時29分発行